HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中央アジアにおける帝国医療研究の射程 : アンナ・アファナシエヴァ氏のセミナー報告 "Imperial Laboratory : Russian Anti-Plague Campaigns in the Kazakh Steppe in the Early Twentieth Century" から
Author(s)	井上, 岳彦
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 47-51
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.47
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88344
Type	article
File Information	JB014_012inoue.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中央アジアにおける帝国医療研究の射程

―― アンナ・アファナシエヴァ氏のセミナー報告“Imperial Laboratory: Russian Anti-Plague Campaigns in the Kazakh Steppe in the Early Twentieth Century”から ――

井上 岳彦

本稿は、2017年10月24日（火曜日、18：00～20：00）に、ルートヴィヒ＝マクシミリアン大学ミュンヘン（以下、ミュンヘン大学）で開催されたセミナー報告にもとづくものである。報告者のアンナ・アファナシエヴァ氏（Анна Эдгардовна Афанасьева）は、ロシア・モスクワにある国立研究大学高等経済学院（Национальный исследовательский университет «Высшая школа экономики»: National Research University – Higher School of Economics）の人文学部文化学院の准教授を務めている。彼女は学術誌*Ab imperio*や*Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*、論文集などで、ロシア帝国医療についてカザフ草原を事例に優れた研究を発表しており［Afanasyeva 2008; 2010; 2013a; 2013b］、ロシアの帝国医療研究を牽引する一人である。報告は、20世紀初頭のカザフ草原におけるペスト（чума）の流行とそれに対抗するロシア帝国の医療措置を、比較史的視点も加えつつ、検証するものだった。

帝国医療の定義について、報告者のアファナシエヴァ氏から特別な説明はなかったが、「宗主国が植民地で確立した医学・衛生学などに関する学知の体系を植民地医学（colonial medicine）と呼び、これらにもとづき、医療・衛生事業が行政化される体制を帝国医療（imperial medicine）と呼ぶ」［歴史学研究会編集委員会 2007:1］という位置づけと、大きな相違はないと考えられる。帝国医療は、19世紀末から20世紀初期に近代医療・衛生事業がグローバルに展開される中で、とくに植民地統治技術の変容と医学・衛生学などに関する学知の体系との関係性を考察することで、近代帝国の姿を逆照射するための分析概念と言えよう。

報告では、アレクサンドル・P・オリデンブルグスキー公（1844-1932）の「ペスト菌予防・闘争措置に関する委員会（Комиссия о мерах предупреждения и борьбы с чумной заразою）」の設置（1897年1月）に至るまでのロシア帝国の近代衛生事業の歴史から始まり、中央政府がカザフ草原でのペスト流行にどのように対処したのかが示された。今日では、当時のペスト流行は、香港発の世界的なパンデミック（「第三のパンデミック」）の一部として知られ、インド方面からカザフ草原西部に流行が拡大したと考えられている。しかし流行当時、中央政府と医学界では、これをパンデミックの一部とみなすべきか、それともエンデミックとみ

なすべきなのかで議論が紛糾したという。カザフ草原のペスト流行をパンデミックの一部として考えたとしても、その感染経路はいったいどこにあるのか。当局の疑惑の目は物品の流通に向けられたり、イスラーム巡礼者の移動性に向けられたりした。感染経路が特定できなければ、どこにどのような検疫網を張り巡らせるべきなのか決定することができず、それは刻一刻と変わる事態とのあいだでジレンマを招いた。

さらに当時ロシア政府によって実行された衛生管理の方法には、イギリス帝国やアメリカの植民地での実践との類似性があったという興味深い指摘もなされた。こうした比較史的視点は、アファナシエヴァ氏がかつてイギリス帝国史を専攻していたことも影響していると推察できる。会場からの質問は、諸帝国の植民地統治技術との比較に集中した。セミナーが開催されたミュンヘンは、科学史や産業史の研究が盛んなことでも知られ、医学史的見地からの専門的な質問も少なくなかった。当時のアメリカ医学・衛生学の潮流との関連性について質問が再三なされたが、浅学の筆者にはよく分からなかったというのが正直なところであった。

アファナシエヴァ氏が吐露しているように、帝国医療には軍事的情報も少なくなく、かつその情報はソ連や現代のカザフスタン／ロシアとの連続性もあるため、ロシア人であっても史料にアクセスしにくい部分がある。ただ、史料的な難しさはあっても、帝国医療の実践現場に微視的にもう少し迫る必要があったと思われる。医療衛生行政の当局者と検疫を受ける人々・予防措置を受ける人々との関係性、医療衛生措置に対する当時の現地社会の反応などの検討がやはり不可欠である。医療措置の決定には首都での机上の議論も少なくなく、現場との齟齬を丹念に追うことが、学知の形成と実践の複雑な関係性を解き明かすことにつながる。すでに述べたように、比較帝国論という巨視的な視点からも帝国医療研究を提示しようとしている点に関して、今回の報告は非常に興味深く、研究のさらなる発展に期待したい。また、医学･衛生学のトランスボーダーな性質を考えれば、インテレクチュアル･ヒストリーと帝国論という点においても、この研究の可能性を感じさせられた。個人的には、カザフ草原での医療衛生実践の経験が、シベリアなど帝国内の他の地域の実践にどのような影響を与えたのかという点に興味がかきたてられた。筆者の研究対象地域（ヴォルガ下流域）でも 19 世紀初頭から、たとえばオーストリア帝国の感染症の流行状況や、シベリアに起こった家畜伝染病の発生などに対して、地方当局は細心の注意を払っていた。防疫体制に関わった医官や軍人の地域を越えた移動を含めて、帝国医療実践の地域間参照関係について考えていく必要があるだろう。

このセミナーを主催するのは、ミュンヘン大学史学芸術学部ロシア・アジア研究講座のアンドレアス・レンナー教授である。ヨーロッパの研究機関では旧来、歴史を含むロシア研究は概して東欧研究の枠組みで論じられてきた。そうしたこれまでの傾向に対して、ロシア・

アジア研究講座がロシア研究をアジア研究との関係で考察しようとしている点は、ヨーロッパのロシア研究、アジア研究にとって新たな可能性を秘めている。レンナー教授の元々の専門は医療史であるが、外国人客員研究員として北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター滞在時（2008年度）に、ロシアとアジアの関係性に強い関心を抱くようになり、新たな講座を立ち上げたそうだ。筆者は今回、ポスドク客員研究員として在外研究の機会をいただき、2017年10月末からミュンヘンに滞在しているが、交通の便の良さからヨーロッパ各国はもちろん、ロシアからも多くの研究者の訪問があり、知的刺激を大いに受ける日々を過ごしている。ちなみに、筆者と机を並べるスイス人の若手研究者は、ソ連社会とアフガニスタン紛争（1978年～1989年）の関係について、主に映像メディアの分析を通して考察している。大学院生の研究テーマも、スターリニズムと中央アジア表象、レフ・グミリョフ、カザンと近代心理学など多彩である。日本の中央アジア研究者にとっても、今後の留学、在外研究、口頭発表を行う候補地として、ミュンヘン大学のロシア・アジア研究講座は重要な拠点のひとつとなるかもしれない。

補遺

参考までに、2017年10月から2018年2月までに開催されたセミナーを、以下に列挙する。報告・質疑応答を含むセミナーの時間はだいたい2時間弱で、その後懇親会が催される。比較的小さな研究グループなので、セミナー報告者とじっくり議論できる点が魅力的である。報告タイトルは、筆者が和訳したものである。

【2017／2018年冬季セメスター】

● 10月24日

アンナ・アファナシエヴァ（国立研究大学高等経済学院、ロシア）

「帝国の検疫所：20世紀初頭カザフ草原における反ペスト・キャンペーン」（英語）

● 11月14日

左近幸村（新潟大学、日本）

「セルゲイ・ヴィッテと汽船協会：ロシア帝国を海域研究の視点から再考する」（英語）

● 11月29日

デイヴィド・シンメルペンニンク＝ファン＝デル＝オイエ（ブロック大学、カナダ）

「パーヴェル1世のインド遠征」（英語）

●1月10日
アンドレアス・ヒルガー（モスクワ・ドイツ研究所、ロシア）
「ソ連・インド関係（1941年－1966年）：脱コロニアル時代と冷戦時代の帝国アジェンダと民族アイデンティティ」（ドイツ語、市民公開講座）

●1月16日
ヨルン・ハッペル（バーゼル大学、スイス）
「アジアの騎手、ボリシェヴィキの怪物、東方からの恐怖」（ドイツ語）

●1月23日
アンドレアス・レンナー（ミュンヘン大学、ドイツ）
「帝国の遺産？ ロシアとユーラシアのあいだ」（ドイツ語、市民公開講座）

●1月25日
ミリンダ・バナルジ（ミュンヘン大学、ドイツ）
「グローバル・インテレクチュアル・ヒストリーのレンズを通して東京裁判を再考する：ラダビノード・パールの法哲学とパラドキシカルな異論」（英語）

●1月30日
ヤナ・グゼイ（サンクトペテルブルグ理工大学、ロシア）
「ロシア極東の反アジア・イメージと革命ロシアの黄禍論」（英語）

●2月7日
フランク・グリュナー（ビーレフェルト大学、ドイツ）
「ミステリーなのか、国民的紋切り型なのか？ 歴史転換におけるロシアの魂と憂鬱のディスコース」（ドイツ語）

参考文献

Afanasyeva, Anna. 2008. “Освободить… от шайтанов и шарлатанов»: дискурсы и практики российской медицины в Казахской степи в XIX веке,” *Ab Imperio* 2008(4), pp. 113-150.

Afanasyeva, Anna. 2010. “Russian Imperial Medicine: the Case of the Kazakh Steppe”, in *Crossing Colonial Historiographies: Histories of Colonial and Indigenous Medicines in Transnational Perspective*, edited by A. Digby, W. Ernst, P.B. Mukharji, Cambridge Scholars Publishing: Newcastle, pp. 57-75.

Afanasyeva, Anna. 2013a. “Kazakh Religious Beliefs in the Writings of Russian Doctors during the Imperial Age (1731-1917),” in *Islam, Society and States across the Qazaq Steppe (18th-Early 20th Centuries)*, edited by N. Pianchola, P. Sartori, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, pp. 143-180.

Afanasyeva, Anna. 2013b. “Quarantines and Copper Amulets: the Struggle against Cholera in the Kazakh Steppe in the Nineteenth Century,” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 61(4), pp. 489-512.

歴史学研究会編集委員会 2007「特集　東アジアにおける医療・衛生の制度化と植民地近代性」『歴史学研究』834、1頁。

（日本学術振興会特別研究員 PD）